



書
評

頭頸部のCT・MRI 第3版

編：尾尻博也，酒井 修

B5・頁880 2019年4月 定価：15,000円＋税
[ISBN978-4-8157-0157-4] MEDSi 刊



<評 者> 本間明宏（北海道大学大学院医学研究院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室教授）

本書は、耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の「画像診断」はもちろん、「解剖」、「機能」、「疾患概念」などの豊富な内容を網羅した良書である。基本的なことから、診療に必要な専門的なことまで詳細に書かれており、医学生、初期研修医、そして専門医を目指す後期研修医、すでにベテランの域に達した専門医、つまり、耳鼻咽喉科・頭頸部外科に関わるすべての者に役に立つ本である。初版は2002年に本邦における頭頸部画像診断に関する最初の本格的な教科書として発行された。第2版は7年前の2012年に発行され、非常にわかりやすく充実した内容だったが、第3版はカラーになり、さらに内容もグレードアップしている。

編者の尾尻博也教授（東京慈恵会医科大学放射線医学講座）と酒井修教授（ボストン大学医学部放射線科）は、誰もが知る頭頸部画像診断が専門の放射線診断医である。尾尻教授は、個人的にも親しくさせていただいているが、耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の解剖・疾患について驚くほど精通しており、「画像のみの情報で診断し、臨床医がほしい情報を提供するためには解剖や疾患についても深い理解が必要」という氏の誠実な姿勢が、この本に結実している。また、執筆者も日本の耳鼻咽喉科・頭頸部外科の画像診断では広く知られた放射線診断医ばかりであり、執筆者一覧を見ただけでも内容の濃い本であることが想像されるが、実際そのとおりの仕上がりとなっている。

序文には、控えめな編者の性格のためか、前版とあまり変わらないようなことをさらっと書いているが、実際は、前版よりもさらにわかりやすく、最近の画像

診断、また、われわれの診療レベルの進歩に対応した改訂がなされている。

たとえば鼻副鼻腔の項目を見てみる（第IV章 鼻副鼻腔は100頁ある）。まず、各副鼻腔の「解剖」のみならず、なんと動脈、排泄路、神経、リンパ流路、そして正常変異まで述べられている。正常変異については17頁もの紙面を割いて詳細な記載があり、鼻副鼻腔の画像診断、手術のシミュレーションにとっても有用である。解説は、実際に診療、手術をする者を意識して書かれており、耳鼻科医の知りたいことが詳しく、そして丁寧に記載されている。

もちろん、「撮像プロトコール」もきちんと書かれており、本書は放射線診断医にとっても、耳鼻咽喉科・頭頸部外科医がほしい情報も知ることができ、きわめて有用であろう。

疾患については、「疾患概念」をコンパクト、いや、必要十分な内容で書かれており、本書を読むだけで疾患について知ることができるほどである。

そして「画像診断」の本なので当然といえば当然だが、画像は1785枚と豊富にあり、診断のポイントが要を得て簡潔に書かれている。時にはファイバー写真とCTあるいはMRIを対比させ理解しやすくしている。

本書は、優れた画像診断の本であると同時に、放射線診断医のみで書かれたことに驚くほど耳鼻咽喉科・頭頸部外科医の日常臨床に役に立つ本でもある。耳鼻咽喉科・頭頸部外科に関わるすべての者が、診療するときに、常にそばに置いておきたい一冊である。